

第1章 調査の概要

(1) 調査の目的

1) 2002年度「農村生活改善協力のあり方に関する研究」検討会の調査研究事項「開発途上国でのセミナー開催や協力現場における有用教材の実用化を行う」の一環として、ラオス国において日本の昭和20～40年代の生活改善経験について発信し、途上国におけるその適用可能性について意見・情報交換する。発表および意見交換は次の三つの機会に行う。

FAOとラオス農林省共催「世界食糧デー第1回ラオスシンポジウム」参加

対象者：ラオスおよび各国からの開発従事者

「農村生活改善協力のあり方」勉強会開催

対象者：現地で活動する日本人開発従事者

「農村開発と生活改善」ワークショップ開催

対象者：国際機関FAO、JICAおよび日本ボランティアセンター(NGO)が実施する農村社会開発プロジェクト対象地域の住民およびプロジェクト担当者

2) 農村調査を通して、対象地域の農家生活実態を把握する。

(2) 調査の背景・経緯

「世界食糧デー」(10月16日)を記念して、FAO(国連食糧農業機関)のイニシアティブの下、「2002年世界食糧デー第1回ラオスシンポジウム：食糧安全と農村生活」がラオス農林省と共催の運びとなり、日本との協調を求めていたFAOはこのシンポジウムにJICAからの参加を要請した。これを受けてJICA農林水産開発調査部委託の「農村生活改善協力のあり方に関する研究」検討会は、調査団として座長ならびに委員2人を派遣することにした。

当調査団はFAO、日本ボランティアセンター(JVC)の現地駐在日本人スタッフとの事前協議を踏まえ、検討会活動の一環として日本の生活改善運動のラオスでの適用可能性を探るため、現地で活動する日本人開発従事者に対する勉強・意見交換会、および農村開発現場での住民とプロジェクト担当官を対象とするワークショップも併せて実施することとし、FAO、JICA、JVCのそれぞれの現地事務所の協力を得て、三者合同のワークショップが実現した。

またラオス国の農家生活の実態を把握するための農村調査に関しては、調査団の発表内容をより現地に沿った具体的なものとするため、ワークショップ開催地の状況に似た所を希望したところ、JICAヴィエンチャン県農業農村開発プロジェクト(VARDP)の活動村にて受け入れて頂くことになった。また生活向上活動の成果が注目されているJICAラオス森林保全・復旧計画フェーズの活動村も視察することとなった。

(3) 調査団メンバー

団長：佐藤 寛 日本貿易振興会アジア経済研究所 経済協力研究部 主任研究員
 団員：山田瓊子 元フィリピン農村生活改善研修強化計画専門家
 団員：太田美帆 英国レディング大学大学院博士課程

(4) 調査期間・日程

1) 調査期間：平成14年10月13日～20日

2) 調査日程：

日時	日程	宿泊地
10/13 (日)	佐藤移動 成田 11:00 発 バンコク 15:30 着 TG641	バンコク泊
10/14 (月)	佐藤移動 バンコク 8:20 発 ヴィエンチャン 9:30 着 TG690 13:00 本調査にかかる打合せ(J V C小川氏、F A O松見氏) 17:30 農村社会開発に関する講 義(J I C A勉強会) 19:30 意見・情報交換会 (参加者13名)	山田・太田移動 成田 11:00 発 バンコク 15:30 着 TG641 バンコク 18:40 発 ヴィエンチャン 19:10 着 QV425 ヴィエンチャン 泊
10/15 (火)	9:00 J I C Aラオス事務所訪問 (宮田次長) 10:00 J V C訪問 10/18のワークショップ打合せ 17:00 Talat That Luang (野菜市場) 見学	ヴィエンチャン 泊
10/16 (水)	9:00 10/18のワークショップ打合せ 12:00 意見・情報交換会(参加者7名) 13:15 移動(ヴィエンチャン県ナブイ村) 14:30 ナブイ村見学 15:00 J I C A農業農村開発プロジェクト(V A R D P) ワークショップ見学 18:00 移動(ヴィエンチャン市)	ヴィエンチャン 泊
10/17 (木)	8:00—17:00 FAO World Food Day Symposium 参加	ヴィエンチャン 泊
10/18 (金)	7:00 移動(ヴィエンチャン県バンキ村) 9:30 17:15 Joint Community Workshop on Livelihood Improvement Programme 開催 17:30 移動(ヴィエンチャン県ヴァンヴィエン市)	ヴァンヴィエン 泊

10/19 (土)	6:30 ヴァンヴィエン朝市見学 8:30 バンファア村学校林視察 9:15 タファア村見学、機織中の女性にインタビュー 10:00-12:00 JICAプロジェクト「森林保全普及計画フェーズ (FOCAP)」事務所訪問 圓谷浩之チーフアドバイザーによるオリエンテーション、事務所、紙布織場、紙梳き場、直売所見学 12:10 バンロンキー村植林地見学 13:10 移動(ヴィエンチャン市)	ヴィエンチャン 泊
10/20 (日)	ヴィエンチャン 6:00 発 ウドンタニ 8:40 発 バンコク 9:40 着 TG009 バンコク 11:20 発 成田 19:30 着 TG640	

(5) 調査活動内容

1) 農村社会開発に関する講義

講義内容：ビデオ「生活と水」上映。「戦後日本の生活改善運動」について概要。
特にラオスの現状における「生活改善」の適用可能性について参加者と意見交換。

参加者：約20名

氏名	所属
アカミネアヤコ	日本大使館二等書記官
石川ミユキ	FAO コンサルタント
太田恵美	JICA 専門家
小川ケイスケ	UNDCP インターン
小川道夫	JVC ラオス事務所長
掛川美千代	日本大使館
カモサチコ	JICA 企画調査員
島崎	アジア開発銀行 灌漑プロジェクト
寺西悦子	JVC 事務員
名村隆行	JVC プロジェクトコーディネーター
福島チサキ	JICA インターン
松見靖子	FAO プログラムオフィサー 他

2) JICA ラオス事務所訪問

面談者：宮田伸昭次長

内容：ラオス一般状況およびJICAの活動状況

- 派遣ボランティア（シニア、JOCV）および派遣専門家約100人
- BHN、農林業、インフラ整備（エネルギー開発）の3セクターの活動を通して人材育成を行うことがJICAの活動方針
- 日本のインフラ整備は質の高さが評価されている
- ドナー間の協調は必須の課題で、情報交換を密にすること、重複するプロジェクトを避けることを心掛けている
- 国内、地域でマーケットが小さいので収入向上プロジェクトは難しい
- シルク加工、品質向上に対する支援を検討しているが、日本側の専門家となる人材が少なくまた高齢化しているので、具体化はしていない
- 人材育成、研修に関する要望が多すぎ、日本側で受け入れ切れない状況にある
- 輸出産業は、内陸国であるため輸送コストのかからない、小さくて軽量のものに限られる
- 観光収入が見込まれるのでサービス業トレーニングが今後必要になるだろう

3) 合同ワークショップ打ち合わせ

参加者：JVC 小川氏、寺西氏、カムコム氏、スーペーニー氏、

FAO 松見氏、今井氏、ティム氏（コンサルタント）

通訳 ワット氏

内容：

①ビデオ「生活と水」内容理解：

ワークショップのファシリテーターとなる2人のJVCラオス人スタッフと、FAOタイ人コンサルタントにビデオを観せ、内容を理解してもらった。ラオ語日本語の通訳者も交えて、ラオ語訳をより適切な表現に修正した。ビデオに合わせてラオ語版ナレーションをテープに吹き込んだ。

②ワークショップの進行方法について検討：

ビデオ「生活と水」を如何に効果的にワークショップで使うか、次の点について、3人のファシリテーターと協議した。

- ・ 村人は視覚聴覚両方でビデオに集中することが難しいのではないか
- ・ 全訳しなくても要点説明だけで十分ではないか
- ・ まず日本語のままビデオを見せて後にラオ語で要点を解説するのはどうか
- ・ 20分通しで見せるより、何回かに区切って見せるほうが集中しやすいのではないか
- ・ メモを取りながら見せることは可能か

最終的には、ラオ語ナレーションを通しでつける、3回に区切って再生し、ポーズごとで設問をつける、全体で1時間くらいのディスカッションをすることが決定した。

③グループディスカッションの内容について検討：

- ・ ビデオの村と自分の村との相違点
- ・ 自分の村における生活上の問題点
- ・ 村の問題を今まではどのように解決してきたか（外部からの援助だけでなく、自助努力の経験はあるか、それはどのようなものか）
- ・ うまくいった点、いかなかった点
- ・ 今後自分たちで解決できそうなことを絞り、具体的な計画を作成する

④山田のプレゼンテーション打ち合わせ：

ワークショップ全体の流れが決まったところで、山田の発表内容を修正し、通訳と要点整理、語意確認などをし、OHPなどの資料の準備をした。



写真1. ナパイ村の民家